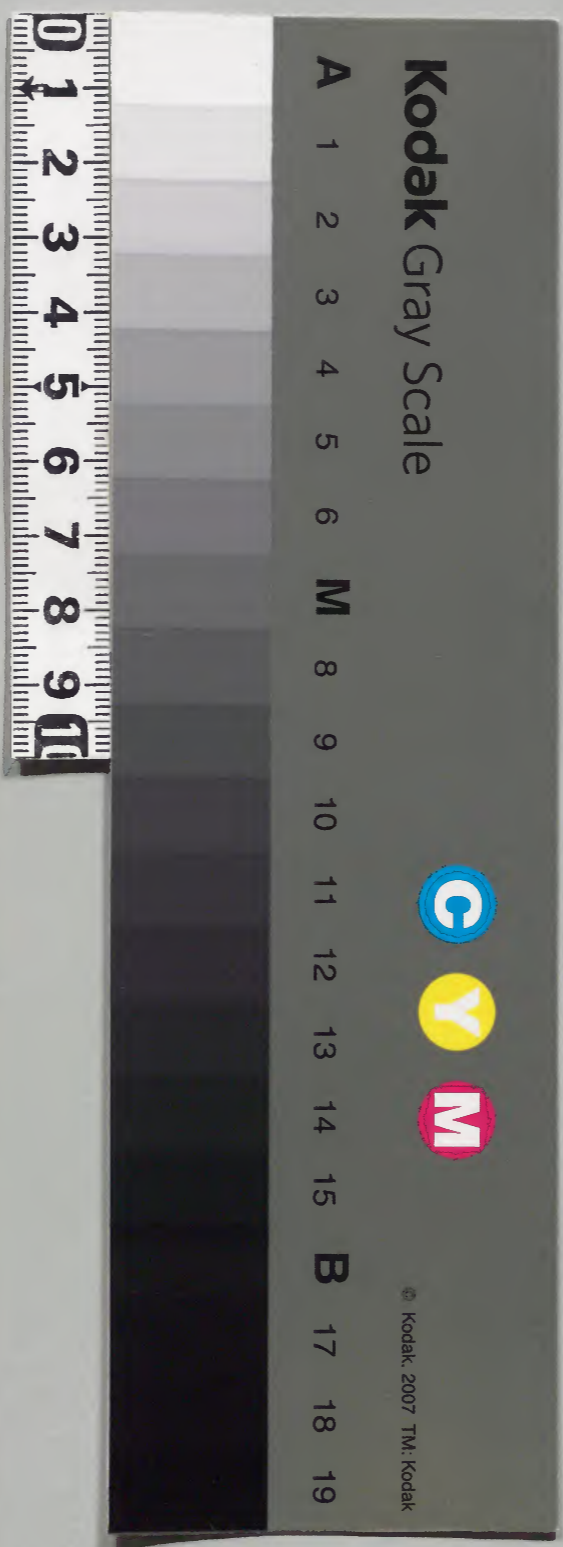


北洛穂集追加

庫文 76 内	
内閣文庫	
番號	和 16383
冊數	22 ( 16 )
函號	170 76



新編集遺加合卷

淺草文庫



一或人問て曰津南地津博の倭をいつれ此めり

ある人其繩張を云繁と云く事と云く或答て云

我若年の言去老人の物語よて承る所候る事

以前相方の蒲倉小五官候とよて申姓を上げ候て

あるまゝ一方を八山の内候と一方を八扇ヶ谷候と

ト云や右扇ヶ谷候の家をよち田備中を噴法とよて

る志の子よた島の妻持賢とよをいふ入道と道  
灌母と名あり文武の両道に達し執中城に佛法眼  
練のほへりて武列河神の城をありしに備倉通用此  
為記表より一城を元立海とて西をいふ家より一と城  
地を元立初とて元吉祥寺に基を城より元立のりといふ  
と繩法杯をいひし始ははよ奉<sup>レ</sup>夜<sup>ヨ</sup>冥<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の告より依ら  
る今の御城より西へ並紙兼付の竹を切りせ二

三平の城よりちよこ一里一寺に在る寺のありては  
は竹の傍より一田の村よりありては寺ありては  
百軒ありては田舎田舎の村とて二村ありては  
はありては清浄の寺ありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては  
ありてはありてはありてはありてはありてはありては

と云く田う城とPぬきおとせ

一問云る河城用ひ公方西面の河橋よりしてPの河を  
河橋の事と云ふ言ひ曰け今めあまきん河橋公方  
西面より中我木嘉年より小糸村房より小川所  
の屋敷より長敷河にまで公方西面の橋所と  
し物より田内橋板河の橋を扱ふこととせとせし  
ことと云ふ物と云ふ言ひ一は北形より治へて

法の種作は信ていふと云ふは信ていふを信ていふ  
一は物多の城より公方西面の久倉より一掃地  
より河より河城也一は河より河より河より河  
公方西面の河より河より河より河より河より河  
より河より河より河より河より河より河より河  
より河より河より河より河より河より河より河

一問云る河城北の河神お島の橋北を治へて













乃子御之依之... 乃子御之依之...

家老御之御切... 家老御之御切...

費... 費... 費...

とばや... とばや... とばや...

治中... 治中... 治中...

治中... 治中... 治中...

柳と... 柳と... 柳と...

乃子... 乃子... 乃子...

乃子... 乃子... 乃子...

乃子... 乃子... 乃子...

乃子... 乃子... 乃子...

乃子... 乃子... 乃子...

乃子... 乃子... 乃子...

乃子... 乃子... 乃子...









廣澤地方系又中向の古跡存の御城の  
今も昔も

女流伝説の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

吾実の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も

御城の御城の御城の  
今も昔も





況も事なるも必す其の由を尋ねて  
以て其の由を明かにせん

一也及事所行致の由を明かにせん  
況も事なるも必す其の由を尋ねて

以て其の由を明かにせん  
一也及事所行致の由を明かにせん

況も事なるも必す其の由を尋ねて  
以て其の由を明かにせん

一也及事所行致の由を明かにせん  
況も事なるも必す其の由を尋ねて

以て其の由を明かにせん  
一也及事所行致の由を明かにせん

況も事なるも必す其の由を尋ねて  
以て其の由を明かにせん

一也及事所行致の由を明かにせん  
況も事なるも必す其の由を尋ねて

以て其の由を明かにせん  
一也及事所行致の由を明かにせん

況も事なるも必す其の由を尋ねて  
以て其の由を明かにせん

一也及事所行致の由を明かにせん  
況も事なるも必す其の由を尋ねて

以て其の由を明かにせん  
一也及事所行致の由を明かにせん

況も事なるも必す其の由を尋ねて  
以て其の由を明かにせん

一也及事所行致の由を明かにせん  
況も事なるも必す其の由を尋ねて



清和天皇御宇に... 別当... 法... 寺... 乃... 刺... 由... 上... 中... 院... 法... 寺... 乃... 刺... 由... 上... 中... 院... 法... 寺...

のつゝに... 中身... 又... 新有... 又... 今... 漢... 予... 六... 中... 之... 初...

漢中但る方々、山南嶽たよ色北列の山名極く  
あり、東照宮の山社後考をわく、西遊之方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々  
山南の所と初と改交と名く山南を、但る方々

唐神集通和合巻一決



養福寺縁起百廿二

一 國々今西の御本寺に於ては此の比の由りき  
少くも其の昔々之に東來及以國東所入國  
の比に今為た此の所より中ふて而く小田畑也  
其の昔ハ榎橋片ト標の亦も遠か宇野中  
後ハ榎山を渡り天龍寺と名付常々佛堂あり  
是れ今と知りてるは後 任此御山徳長不之



日存只今のよまのあぢく出引後と存とありて同  
く云ふ元はききつたつハ西の依るのゆき信抄年々  
の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
西の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
とすゆゆの義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
此の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
存の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
中しる者まきくは今あの中世下の中世轉換に江

横江御渡社に由る

此の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
西の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
とすゆゆの義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
此の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
存の義の氣とまきくは今あの中世下の中世轉換に江  
中しる者まきくは今あの中世下の中世轉換に江









上は...の...  
 中...  
 下...

一 同...  
 ...





かど知りしことなゆふにたのりなきをわうし知りて割  
厚しもの但道中一程作らうにたなきをえし中徳寺  
庭入りなりと割屋はあふしと月夜にたしと江佐知  
とありお又、西宮中一と身立北條家の高の地と江  
中ありあの屋とありきし西宮のさふと油の江佐  
中あり割中屋のなや中あり江佐屋の今  
あふしとあふしなりなりとありて怪く津屋と梅入と  
あふしとあふしとあふしと江佐屋の西宮の屋あり  
新屋の知しはあふしとは江佐屋の西宮中一と身立  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしと江佐屋  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと  
あふしとあふしとあふしとあふしとあふしとあふしと







一國を以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
今茲に海峯を以て山嶽と爲すに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
是の如くは善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては  
治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては山嶽と寺とを以て善く治むるに依りては



古事記の事云坊より中一信の事云云云云十坊に清信  
少くお神の御中より一信の事云云云云の事云云云云  
の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
中納言の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
と云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
乃の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
信の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
又云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
守の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云  
清信の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云

一 國土云云の事云云 神田の神の事云云 信の事云云 清信の事云云  
事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云の事云云云云

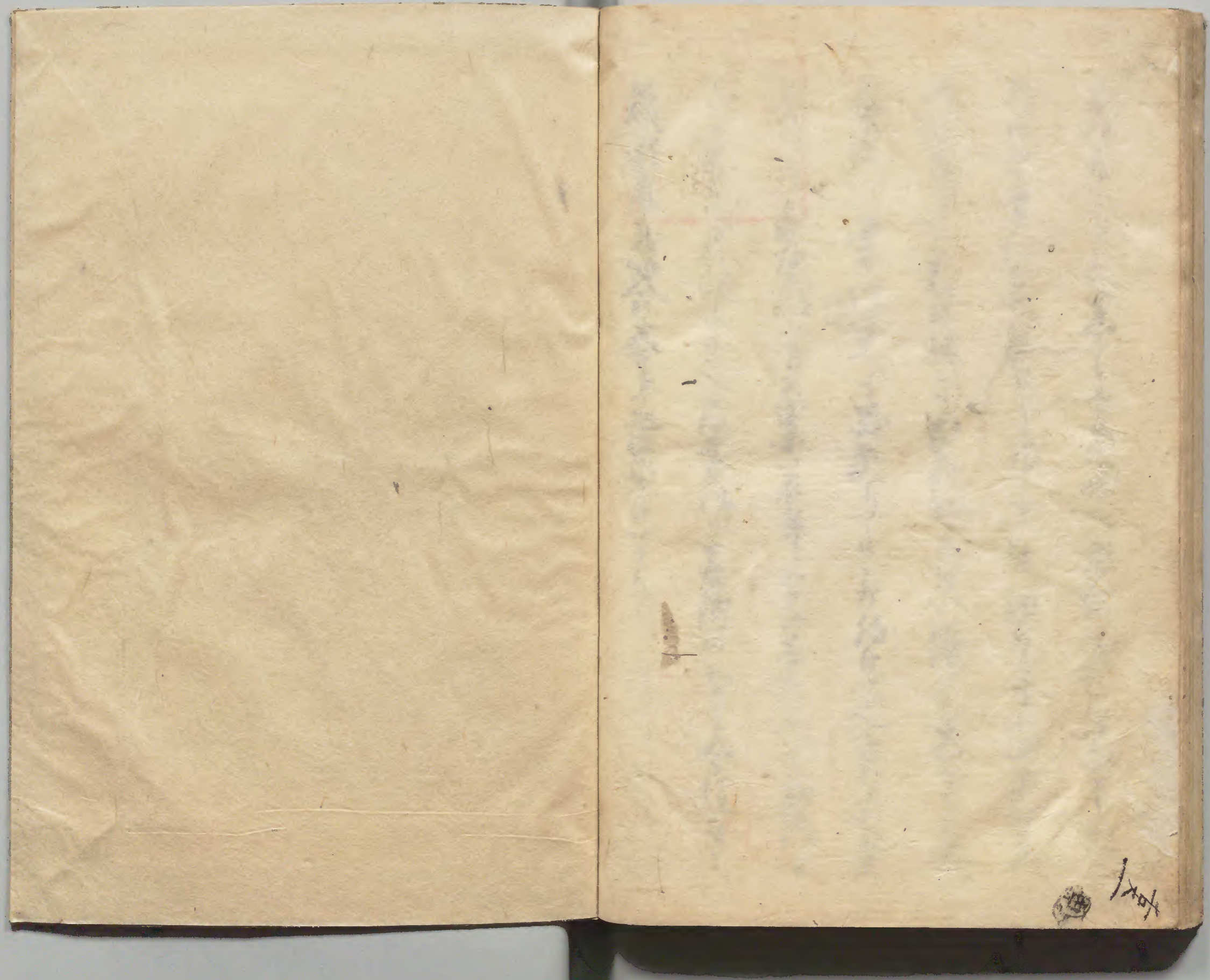
此書と沙敷内とあるは、そのまゝに記すは、  
并渡渡ちり及上野郡赤松町の地味神社に  
安永のころより地味ふちをききしなり、その中ふちを  
し毎年九月祭礼のころより、作のあまの年中の月  
了と云ふなり、此書所記の御書と初後く乃  
聖宮物と相おしるは、御書と御書と御書と  
流は、そのまゝに記すは、そのまゝに記すは、  
別冊の抄のまゝに記すは、其のまゝに記すは、  
の法地を記すは、其のまゝに記すは、  
由門構のまゝに記すは、其のまゝに記すは、  
お代りしを記すは、其のまゝに記すは、  
幕と法澤河、そのまゝに記すは、  
由門外の構を記すは、其のまゝに記すは、  
今に津田宗隆のまゝに記すは、其のまゝに記すは、











1/204

